AV企画室 PRESENTS

下北沢で見つけた笑顔

カフェ店員りな（24）はじめての撮影

18禁

高橋 りな

24歳／カフェ店員

T155 B86(D) W60 H86

好奇心が止まらない笑顔の店員さん、エプロンの下は――

オフショット＆オフレコ集

カメラが止まった後の、りなの素顔

休憩中：朝食抜きだったりな、おにぎりにかぶりつく

着替え：エプロンの紐が結べない

本編後：カメラが止んでも離れない二人

トラブル＆ハプニング集

全部、作品に収録しました

撮影中、本物の店長からシフト確認の電話

マイク電池切れ：名言パート撮り直しで爆笑

本編中：騎乗位で足がつって涙目

下北沢で見つけた笑顔

カフェ店員りな（24）はじめての撮影

街で声をかけた笑顔のカフェ店員が、好奇心のままに初撮影。
笑いあり、ハプニングあり、そして本気のベッドシーン。

閉店後のカフェで…

エプロンの下は勝負下着

騎乗位で本気モード

PROFILE — 高橋りな

24歳／カフェ店員（古着屋バイト掛け持ち）T155 B86(D) W60 H86
趣味：ライブ、古着、フィルムカメラ　経験人数：5人　彼氏：なし
好きな体位：騎乗位（自分で動くのが好き）
NG：痛いプレイ、罵倒、アナル、野外露出 — 厳守で撮影

CHAPTERS

1. ピックアップ＆街インタビュー（下北沢）
2. 室内インタビュー — サイズ測定と下着チェック（マイク電池切れの撮り直し付き）
3. カフェ制服 — 閉店後の二人（本物のシフト電話が鳴るハプニング収録）
4. 本編ベッドシーン — 足つり中断からの、騎乗位リベンジ
5. エンディングインタビュー — 「経験値、上がった？」

AV企画室 HKR-001 本編120分 監督：ハル
※本作はフィクションです。出演者は全員成人、同意の上で撮影。

4 580001 000001

第1作『下北沢で見つけた笑顔』

第1作『下北沢で見つけた笑顔』

シーン2 ― 室内インタビュー

下北沢のカフェ前でのピックアップから二時間後。撮影は、駅から少し歩いた雑居ビルの一室、ソファと観葉植物だけの小さなスタジオに移っていた。

りなは支給されたオーバーサイズのグレーのパーカーに着替え、ソファの真ん中にちょこんと座っている。膝をそろえ、両手は膝の上。さっきまで街で見せていた屈託のない笑顔に、少しだけ緊張の色が混ざっていた。

「はい、本番いきまーす。……りなちゃん、今の気持ちは？」

カメラの横から、インタビュアーの声。

「えー、なんだろ。さっきまで普通にカフェのバイトの話してたのに、急に“撮影”って感じがしてきました。照明、熱いし……心臓バクバクです」

「じゃあ、まず確認から。今日の撮影、自分の意思で来てる？」

「はい。……はい！　だって、私、好奇心が止まらなくて。エッチな経験値、もっと上げてみたくて来ました」

言い切ってから、自分で言った言葉に照れたのか、りなはパーカーの裾をぎゅっと握った。

「経験値って、ちなみに今どれくらい？」

「えー、それ聞きます？　……5人、です。同い年の元彼が3人と、年上が2人。多いのか少ないのか分かんないですけど」

「最後にしたのはいつ？」

「2ヶ月くらい前かな。だから今日は……ちょっと、楽しみにしてたかも」

頬がほんのり赤い。インタビュアーが「どんなエッチが好き？」と踏み込むと、りなはソファにもたれて天井を見上げた。

「私、キス長いのが好きです。あと、ぎゅってされながらだと安心する。……あ、それと」

「それと？」

「自分で動くのが、好き。騎乗位とか。相手の反応が見えるのが楽しくて」

「へえ、それは後半でたっぷりやってもらおうかな」

「えっ、やだ、言わなきゃよかった……！」

りなは両手で顔を覆って笑った。その笑い声がスタジオに響いた、その時だった。

――ピピッ、ピピッ。

「あ、すみません、カット！」

カメラマンが手を挙げる。りなの胸元に付けたワイヤレスマイクの電池が切れかけていて、音声にノイズが乗りっぱなしだったという。しかも一番の名言、「経験値上げたい」のくだりが丸ごとノイズまみれ。

「えー！　今の、私けっこう勇気出したのに！」

「ごめんごめん、テイク2でお願い。もう一回、『好奇心が止まらなくて』のとこ」

「うー……はい。……私、好奇心が止まらなくて、エッチな経験値、上げたくて来ましたっ」

棒読みである。スタッフ全員が吹き出し、りなもつられて大笑いした。おかげで肩の力はすっかり抜けた。

「オッケー、その緩んだ顔の方が100倍いい。採用」

トラブル：マイク電池切れ

HKR-001 スチル

― 撮影再開：スリーサイズ測定

「じゃあ次、恒例のスリーサイズ測定いきます」

「うわ、本当にやるんだ……」

メジャーを手にした女性スタッフが（この測定だけは女性スタッフの担当だ）、りなの背後に回る。

「まずはバスト。息吸ってー、吐いてー……86」

「Dカップの86です」

「へへ、なんか数字で言われると恥ずかしい」

続いてウエスト。メジャーが素肌に近い位置で締まった瞬間――

「あはっ、くすぐったい！　まって、まって無理！」

合言葉が違う意味で、早くも発動した。りなは身をよじって笑い崩れ、測定は失敗。テイク2、今度は自分でお腹に力を入れて耐えるも、メジャーの冷たさに「ひゃっ」と小さく跳ねた。

「ウエスト60、ヒップ86。本人申告と寸分たがわず。本物です」

「当たり前です！　カフェの賄い食べ過ぎて、最近やばいと思ってたのに……よかった」

測定が終わる頃には、パーカーの前が少しだけはだけ、鎖骨から胸元に